様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：１２３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2022
課題番号：１６Ｋ０４７４０

研究課題名（和文）予防キャリア問題教育に関する教科間連携の日仏比較とカリキュラム開発

研究課題名（英文）Comparison and Curriculum Development of Preventive Career Problems Education in France and Japan

研究代表者
上里　京子（UESATO, Kyoko）

群馬大学・教育学部・教授

研究者番号：８０２０２４４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　フランスの予防キャリア教育の中心である「予防・健康・環境(PSE)」科の最新プログラム(2019年）を分析した結果、教育内容は12のモジュールから成り、2009年のプログラムより一層「職業リスク予防」に関する内容が拡充されていた。各モジュールはカリキュラム表で示され、テクノロジー、道徳・公民などの多くの関連教科間で、水平的・垂直的な連携を図る総合学習が推進されていた。このような関連教科を交差する演繹的で分析的な学習と、実習や企業研修等における帰納的で総合的な学習を螺旋的に繰り返す系統的なカリキュラムが常に改良されている点は、日本のキャリア教育カリキュラムの再構築にとって重要な示唆となろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究で分析したフランスの「予防・健康・環境」における予防キャリア問題教育に関する先行研究は筆者の研究以外は存在せず、日本の特別活動等に分散して存在するキャリア教育カリキュラムとの国際比較研究や、生活科学教科をコアにして統合したカリキュラム開発研究に至っては皆無であったため、本研究成果の学術的価値は高いといえる。また、本研究では、日本の概説的な教育課程研究の限界を克服するため、フランスの予防キャリア教育に関する各教科の多元的な「総合化」と「分化」の論理と内容を分析することができ、それによって日本の予防キャリア問題教育のカリキュラム開発に具体的な示唆を得られたこと等に学術的・社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：An analysis of the latest program (2019) for the "Prevention, Health and Environment" (PSE) curriculum, which is the core of preventive career education in France, revealed that the educational content consists of 12 modules. Compared to the 2009 program, there was a further expansion of content related to "occupational risk prevention". Additionally, each module is structured as a curriculum framework, promoting interdisciplinary and integrated learning through horizontal and vertical coordination among various related subjects such as technology, moral, and civics.
The systematic curriculum emphasizes deductive and analytical learning that intersects multiple related subjects, as well as inductive and comprehensive learning through practical training and corporate internships. This spiral repetition of learning approaches is continually improved. These aspects provide significant insights for the reconstruction of career education curricula in Japan.

研究分野：教育学、教科教育学

キーワード：予防キャリア問題教育　カリキュラム構成　カリキュラム開発

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年の産業・経済の構造的変化に伴う雇用の不安定化を背景として、若者に就業不安が広がっており、フリーターやニート、失業や貧困問題がクローズアップしている。このような就業をめぐる問題や、将来の職業生活に起こることが予想される問題に対して、その解決と予防教育を実践しているフランスの「予防・健康・環境」の新カリキュラムを分析し、関連教科間の連携の実相を明らかにすることによって、具体的な教材論・教育実践レベルでの問題解決の方法と、予防キャリア問題教育のカリキュラム開発に示唆を得たいと考えた。

若者の労働意識の低下や失業問題への対応の遅れが、国際競争力の低下となって現れたフランスの抱える課題は、日本と類似した点が多く、キャリア問題対策等に参考となる点が多く含まれている。

２．研究の目的

本研究は、若者の職業意識と職業能力の低下、フリーターやニートの増加などの就業問題と、労災や貧困問題など将来起こりうるキャリア問題に対して、その解決と予防教育を実践しているフランスの「予防・健康・環境」科のカリキュラムと教科書を分析することによって、具体的な教材論・教育実践レベルでの問題解決の方法と、予防キャリア問題教育のカリキュラムを開発することを目的とする。さらに、就業問題は、生き方モデルとしての親の教育力の低下問題の影響が大きいことから、親準備教育としての「ライフキャリア教育」や、2015 年にフランスの教育課程に新設された「モラル教育」との関連構造を調査して、持続可能な生涯発達を可能とする問題解決力とキャリア問題予防力を確実に習得できるカリキュラム開発を試みる。

３．研究の方法

(1) はじめに、日仏のキャリア教育・生活教育に関する文献・資料の収集、整理を進める。特に、2009 年以降漸次公布されているフランスの「予防・健康・環境」科、「道徳」の新学習指導要領と教師用指導書、教科書等をフランス現地において調査・収集する。
(2) 日仏比較研究に不可欠な、キャリア教育、家政・生活教育、道徳教育等における基礎概念の内容を明らかにし、それらを比較可能にする研究方法論を検討する。
(3) 予防キャリア問題教育に関わる各教科の科学的概念、学習方法等を分析し、それらの特徴と学力概念との関係に着目して日仏比較を行う。そのため、フランス人研究者、教科書執筆者、視学官、教育実践家との意見交換と資料収集、授業研究を行う。それらの調査結果をもとに、日本の予防キャリア問題教育のモデルカリキュラムを開発する。

４．研究成果

本研究の方法論に基づき、フランスの「予防・健康・環境」科における予防キャリア問題教育のカリキュラムについて、プログラム（学習指導要領）等の分析を通して考察した。

フランスの予防キャリア教育の中心である「予防・健康・環境(PSE)」科の最新プログラム(2019 年）の序文において、この教科の目的は、生徒に①予防、健康、環境に関する知識、②様々な方法に基づく分析的アプローチ、③科学の教養や、科学的事実と先入観に基づく考えを区別して批判的なセンスを発揮し、良識ある選択を行う力、④自身と他者を尊重しつつ社会に適応する社会的な能力と公民としての能力、⑤自己の健康及び環境に対する責任ある行動力を習得させ、自己の環境とりわけ職場環境において予防を意識する責任ある個人を育成することである、と明示している。

PSE の指導目標は、カリキュラムの目標と共通した 3 つのテーマ（A 自己の健康資本に責任を持つ個人、B 自己の環境で責任ある行動を取る個人、C 職場環境での予防を担う個人）を軸に編成されている。

また、カリキュラムを構成する各単元に設定された諸活動を通じて、共通の分野横断的能力を育成することを目指しており、「育成すべき能力」として、①情報を処理する、②所与の状況において分析手法を適用する、③特定の生理現象、環境問題、法規定を予防措置と関連付けて説明する、④問題を解決するための方法を提案する、⑤選択の理由付けを行う、⑥分かりやすい構文と適切な語彙を用いて筆記・口頭コミュニケーションを行うことに関する 6 つのコンピテンシーを明示している。

これらの目標にアプローチして学んだことが確実に定着し、企業研修などの実地経験で身につく新たな概念とともに深められる学習プロセスが示され、科学的教養の発展が企図されている。

さらに、客観的な科学的事実と科学文献の分析をもとに、統計に由来する定量データに裏付けられた主張を展開できるように指導すること、職業リスク予防の包括的な理解を図ること、他の

分野の教育との様々な形での連携を推奨している。
一般的に、科学教育はアナリシス（分析）、生活教育はシンセシス（総合）が中心であるが、この教科では、現在およびこれから起こる可能性のあるキャリア問題を分析し、修得した知識や公民としての能力、行動力、科学の方法論を用いて、問題解決と予防を図ることに総合できる系統的かつ実践的なカリキュラムが編成されている点が特徴的である。

PSE の教育内容は、前述の A 自己の健康資本に責任を持つ個人、B 自己の環境で責任ある行動を取る個人、C 職場環境での予防を担う個人、の 3 大テーマを軸にしたモジュールとして構成され、予防キャリア問題教育に関する内容は、主にテーマ C に位置付けられた 12 のモジュールから成っている。(C1:「労働の保健衛生と安全」という課題、C2:職業リスク予防の基礎知識、C3:予防の担い手、C4:職場での支援と救助 、C5:職業リスク分析、C6:専門分野に固有のリスクの分析、C7：労働衛生の管理、単元 C8：労働災害及び業務上疾病の申請と補償、C9：心理社会的リスク、C10：身体活動に起因するリスク、C11：作業場面の分析、C12：職場における処遇の平等）
2009 年の PSE プログラムにおけるモジュール（M7 危険の予防、M8 職業部門における危険の予防、M9 企業における予防の規則で定めた枠組み、M10 職業上の危険と予防の病態生理的影響、M11 危険によるアプローチ（精神的負担による病態生理的影響、精神的負担に関連した危険の予防)、M12 事故によるアプローチ（予防の過程で職業部門の事故分析を活用)）と比較すると、2019 年のプログラムでは一層職業リスク予防に関する概念と知識、リスク分析の実践に関する内容が拡充している。
特に注目すべき大きな変更点は、プログラムの序文に、PSE の教科内容と関連する教科や学習内容、学習活動等が具体的に示された点であり、その理由として、“職業教育科目の担当教師が連携し、複数教科にまたがる内容の授業を行うことによって、職業リスクの予防というテーマを幅広くカバーすることができる”ことをあげている。また、PSE の授業と関連・交差する部分が多く、組み合わせやすい主な教科として、“教育及び保健衛生・労働・環境分野の優先的な取り組みに貢献する体育”“国語、歴史・地理及び道徳・公民”“数学、物理・化学など”を示している。さらに、“校内看護師、保健衛生・市民教育委員会（CESC）との連携によるプロジェクトや、保健衛生サービスの一環としてのプロジェクトを実施すること”を促している。

各モジュールはカリキュラム表として構成され、コレージュで学修した概念のうちモジュールの内容に関連するものがあげられており、さらに、各モジュールの末尾で、他教科とのつながりを示している。また、表の上部には、コレージュの生命と地球の科学（SVT)、テクノロジー、物理・化学、道徳・公民（EMC)、体育（EPS）ですでに取り上げた概念が明記され、これらの概念を再度明確にあげているのは、生徒がすでに知っていることを新たな概念の習得に役立てられるようにするためである、と理由を示している。
つぎに、モジュールの中でも、「職業リスク分析」を単元内容とする C5 のカリキュラム表を例に、他教科との関連についての記述内容を概観する。
①表の上部に、これまでに取り上げた概念として、「PSE」：モジュール C1（職業リセ 第 2 学年)：労働の保健衛生及び安全という課題、モジュール C2（職業リセ 第 2 学年)：職業リスク予防の基本的概念、「テクノロジー」（コレージュ　第 4 学年)：各種のリスクを意識し、その原因及び自然と人間に対する影響を分析する、「物理・化学」（コレージュ　第 4 学年)：自身と他者の安全（リスク及びリスク管理)、「体育（EPS)」（コレージュ　第 4 学年)：リスクを評価し、無理をしないことを学ぶ、ことが明示されている。すなわち、既習概念を確認しながら、教科を横断し、テクノロジーや物理・化学、体育での学びと関連付け、それらを総合して課題解決を追求することが推奨され、教育課程を垂直かつ水平に関連づけている。
②表の左の欄には、「学習目標」が具体的に示され（例：リスクに直面する 1 名又は複数名の作業者を保護するための対策を提案する)、中央の欄には、「関連する重要な概念」（例：集団の保護・個人の保護)、右の欄には「活動・学習媒体」（例：労働法典の「予防の一般原則」をもとに提案された予防対策の関連付ける）が示されている。
③表の最下部には、再度教育課程を垂直的・水平的に関連付けることが指示されている（例：第 1 学年　数学「統計と確立」との連携)。

以上の分析結果から、PSE の予防キャリア問題教育に関する内容は、12 のモジュールから構成され、前プログラム（2009 年）より一層「職業リスク予防」に関する内容が拡充されていた。また、2019 年のプログラムでは、関連教科との連携や既習概念等を復習し、活用することが詳細に指示されており、各モジュールの内容ごとに関連する多くの教科間で、水平的・垂直的な連携を図る総合学習が推進されていた。このような多くの教科を交差する演繹的な学習と、実習や企業研修等における帰納的な学習を螺旋的に繰り返すことは、科学の方法論である分析と総合を繰り返すことであり、現在及び将来起こる可能性のある様々な職業生活問題とリスクを分析し、習得した公民としての能力や行動力を駆使して、問題解決と予防を図ることに総合できる系統的かつ実践的なカリキュラムが常に改良されている点は、日本のキャリア教育カリキュラムの再構築にとって重要な示唆であるといえよう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 上里京子	４．巻 第32号
２．論文標題 イレーヌ・テリー『フランスの同性婚と親子関係 ジェンダー平等と結婚・家族の変容 』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 フランス教育学会紀要	６．最初と最後の頁 89ー90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 上里京子	４．巻 第29号
２．論文標題 家政教育の生成と展開過程における男女の関係性	５．発行年 2017年
３．雑誌名 フランス教育学会紀要	６．最初と最後の頁 39-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Tsunetaka Yokoo,Masao Uesato,Kyoko Uesato	４．巻 －
２．論文標題 Histrical Development and Perspectives of Technology and Vocational Education in Japan	５．発行年 2016年
３．雑誌名 Creating contexts for learning in Technology Education	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 上里京子	４．巻 －
２．論文標題 家政教育の生成と展開過程における男女の関係性について	５．発行年 2016年
３．雑誌名 フランス教育学会　第34回研究大会要旨集	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 上里京子
2．発表標題 家政教育の生成と展開過程における男女の関係性について
3．学会等名 フランス教育学会　第34回研究大会（招待講演）
4．発表年 2016年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関